

大会、会開式で演説するディサイ首相 (3月24日、インド商工会議所大講堂於)

『ダイナミックで堅固で倫理性のある民主主義』を求めて

ニューデリーMRA国際会議報告

岡本典子



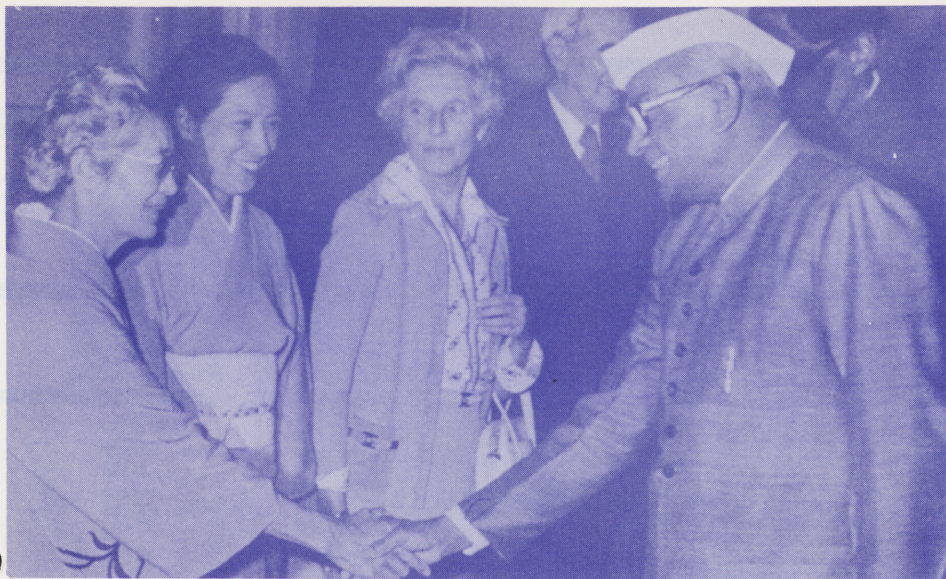
三月二十四日から二十八日まで、インドの首都ニューデリーで、「ダイナミックで堅固で倫理性のある民主主義」のテーマのもとに、MRA国際会議が開催された。

開会日、会場のインド商工会議所大講堂には、モラジ・ディサイ首相をはじめ、ダルミヤ氏等、政界、産業界、各分野から指導者が集った。海外からも、各国大使、外交官、MRA代表等六十余名が出席した。主な顔ぶれをあげてみると、西ドイツからは国会議員で海外援助委員会会長のピーター・ピーターセン氏。シヨック社社長のフレデリック・シヨック氏。オーストラリアから元文部大臣のキム・ビーズレー氏。ノルウェーから元文部大臣のアントン・スクルベルク氏。オランダからフィリップス社社長のフレデリック・シルビア・フィリップス夫妻等で、我国からは駐印大使の鈴木孝氏、鴨原修次参事官、住友商事ニューデリー支店長田中雅雄氏。尾崎記念財団理事長代行の相馬雪香氏。住友美子氏。狩野明男氏らが出席した。参加者は総勢五百名以上のぼった。

ガンジー政権のもと、緊急事態宣言がしかれて以来、十九カ月にわたる極端な制圧を経験したインド国民は、昨年三月の総選挙では自らの意志で、再び民主主義と自由を取り戻した。この総選挙は、インドの国民が、自由と民主主義の価値を再認識したものであったと、世界から高く評価されたものであった。

そしてこの一年間、再び取り戻した自由と民主主義をどう機能させていくことができるかを問われていた。これはインドだけに限られた問題でなく、真の

民主主義を目指す多くの国々の間にも問われているものでもあり、民主主義そのものの可能性が問われる試金石ともなっている。



デリー大統領と握手をかわす相馬雪香氏と住友美子氏

こうした状況にあつて、この国際会議ではいかに各国の指導者や、大会出席者等が、インドの指導者に接触を持ち、示唆を与え、影響を与えられるかが期待され、意義を見い出そうとするものであつた。

マハトマ・ガンジーの令孫で今回の会議の責任者のひとりであつたラジモハン・ガンジー氏は「あの自由が全く欠乏した十ヶ月の後、われわれは自由を呼吸し得るようになった。しかし問題は、あの十九ヶ月間の状態と現在とを比較するのではなく、今ある状態と、あるべきもとの違いに目を向けるべきだ。」

「インドで民主主義が、成功するか否かは、一部は、政府のやりかたによつて決められるだろうが、大部分はインド国民のありかたによつて決められるのだ。生活の過酷さ、飢餓、権力の濫用、無関心さが、ふえるか減るかは、われわれ国民の生きかた次第によるのである。」と述べた。

Ⅱ 民主主義の敵は放縱である Ⅱ

開会日のその日は、デイサイ首相が総理に就任して、丁度一周年目に当る日であつた。

一年前のその日は、首相を始め、選出された代表たちの多くは、マハトマ・ガンジーの碑の前で、公私の生活を通して正しく生き、協力して国家につくすことを誓つたという。この日首相は五百人の聴衆を前に四十分間の講演をした。

「貧しく、後進的な人びとにとつて、民主主義は贅沢だという考えかたは、非常に危険だ。そうした便宜的な考えかたが高じて独裁への道が開かれるのだ。どの様な状況にあるうと、デモクラシーは不可欠である。困難な問題に直面すると、往々にして民主主義への信念を失い、近道をとりにたくなる。しかしインドの例でも明らかな様に、近道はかえつて国民を真の幸福から遠ざけてしまう。力足りない民主主義を強くすることはできないが、民主主義そのものを捨ててしまつてどうしてそれを強くすることができよう。」

「国民よりも自らが重要だと指導者が考え始めた時、民主主義は危険にさらされる。民主主義が倫理性をないがしろにして、強力に運営機能される時、それは破綻に追いやられてしまう。」と述べ、民主主義の第一義は倫理性にある

ことを強調した。「民主主義の最大の敵は放縱である。」「われわれはマハトマ・ガンジーの教えの通り、己に対してより厳しく、他人に対して寛容になることを学ばねばならない。」と加え信念を語つた。

この大会の様子は、主要新聞インディアン・エクスプレス等に大きく取り上げられ、またテレビにも中継報道された。

Ⅱ 汚職に対する解答 Ⅱ

後日会場をインド国際センターに移し、三日間熱心な分科会が続けられた。そこでは、ラム国防大臣はじめ、シャンティ法務大臣、カナ判事、タークンデ前最高裁判事、マルカーニ、編集局長、等々インドの指導的立場にある人々が多く加わつた。

ラム国防大臣は、民主主義が正しく機能するためには、国民のゆるぎない倫理性に富んだ政治への監視が不可欠であること、特に識者の勇氣ある責任の行使が重要であることを訴えた。

オーストラリアの元文部大臣、キム・ピースレー氏は、「われわれが良心の重要性を受け入れない場合、力の重要性を受け入れることになる。民主主義は啓発された良心の発想によるべき

ものだ。」と述べ、文部大臣当時、オーストラリアの原住民に対し教育の機会均等を法令化したのも他の理由によるものでなく、倫理的で正しいと信じたからであつたと、経験に基づく信念を語った。

また日本を代表して、相馬雪香氏は、「民主主義は政治の腐敗と汚職によって危機にさらされている。汚職に対する解答を待たない限り民主主義は確固たる基盤を持つことはできない。」と述べ、「政治家ばかりを頼るのでおのの立場で今日決意することが明日の社会を正しくするよすがになる。」と結び、参会者の決意を呼びかけた。住友美子氏は「企業人の妻の立場から、社会に貢献し得る企業のありかたを見つめ、同時に純潔に生きようとする新たな決意を語った。」

|| 反響を呼んだ二つのMRA劇 ||

大会期間中、インド商工会議所大講堂で、ピーター・ハワード原作「私達は明日」とアラン・ソーンヒル原作「忘れられた要素」の両劇が欧・豪州の国際演劇チームによって上演された。L・K・アドバーニ情報・放送

大臣はじめ、元閣僚T・A・ハイ氏。マードウダツダバータ鉄道大臣等、政府高官の観劇の姿も多く見られた。

「忘れられた要素」は日本でも一九五一年に帝国劇場で上演されたことがある。労組委員長の家と経営者の家庭に起こる争いと和解を描いた作品だが、「誰が正しいかでなく、何が正しいか」のテーマを、演出もすつきりとまとめられ、新鮮で訴える力が強かった。今、インドでは各方面で待遇改善等を要求したストライキが絶えず、前後の事情を無視した行き過ぎたものも少なくない。そうした状況の下に、この劇の示唆する処は大きかったように思う。大会後も、経営者団体、労・使同盟の団体等の招待を受けインド各地マニパール、ボンベイ、プーナ等を廻り、三ヶ月にわたるキャンペーン公演を続け、各地で反響を呼んでいったようだった。

この劇団をインドに送るため、何らかの形で支援した欧・豪州の人々は千人以上にのぼると聞いている。インドに寄せる心ある人々の結集した力、厚いチームワークの輪を感じた。日本もこうした時に、率先して責任の

一端を荷負える様にならなくてはと思わずにはいられなかった。

|| 日本大使館、駐在日本人を訪問 ||

日本人チームにとつて、大会中のハイライトのひとつは、日本大使館をはじめとする駐在日本人の訪問ではなかつたらうか。大使御夫妻にお招き頂き、参事官御夫妻も混じえて、昼食を頂きながらの歓談はなごやかで、価値あるものだった。

日印関係に関してもっと積極的なものにしていきたいとの抱負や、日頃の外地での苦心談、ビルマ大使当時の経験談や、最近行なわれたコヒマでの最後の遺骨収集、慰霊塔建設に關しての御尽力等々、話題が尽きなかった。

一方、田中氏御夫妻をはじめとする住友商事インド駐在の御夫妻等を訪問し、日頃の苦心談を伺ったり、今回の大会やMRAについての紹介をする機会を得た。この日のことがきっかけとなり、嶋原参事官夫人も混えて、後日、商社の婦人方を招待し、当地の企業家婦人、MRA関係者婦人等を紹介する婦人の交歓会を持つことができた。

民主主義の敵



倫理性と調和をもった 新しい国際政治経済の秩序を目指して

1978年度

産業人会議開催！

人種、宗教、階級を越え、新しい世界の変革を求める人びとが更えている。その人びとのネットワークを作り、国際的規模で新しい産業及び産業人のありかたを求める産業人会議は昨年

に引き続き、今年もスイス・コーの世界大会と呼応してわが国で開催された。

五月二十七日、二十八日の両日は緑濃い箱根、強羅の東芝翠荘で、そして最終日は東京大手町にあるサンケイ会館ホールで開かれた。今回もイギリス、アメリカ、オーストラリア、スエーデン、フランスの五力国から十名の海外代表が参加し、わが国からは各界を代表する人びとが加わって、倫理性と調和をもった新しい国際政治経済の秩序をめざすというテーマのもとで互いに忌憚のない意見交換を行ない相互理解と協調を深めることに成功した。

五月二十七日、二十八日の両日は緑濃い箱根、強羅の東芝翠荘で、そして最終日は東京大手町にあるサンケイ会館ホールで開かれた。今回もイギリス、アメリカ、オーストラリア、スエーデン、フランスの五力国から十名の海外代表が参加し、わが国からは各界を代表する人びとが加わって、倫理性と調和をもった新しい国際政治経済の秩序をめざすというテーマのもとで互いに忌憚のない意見交換を行ない相互理解と協調を深めることに成功した。

野弘典氏の協同で進められた。以下は箱根会議と東京会議の主な代表の発言の一部を集録したものである。(なお議事録全文をご要望の方はMRA日本協会事務局宛に申し込まれたい)

高瀬正二氏

(東芝・専務取締役)

「地球は小さくなった」とは、よく言われる言葉ですが、国と国との間の時間的距離に比べれば、国民と国民との間の心情的な距離は、まだはるかに遠いものがあると言わざるを得ません。政治的にも経済的にも多くの深刻な利害の対立や摩擦が存在しております。これらの対立や摩擦を解決する道は相互の理解を深める以外にないと思います。そして相互の理解を深めるため

中島正樹氏

(三菱総研社長)

自由と平等との交差点を捜していかなければならないと思えます。この一つの方向のひとつとして、今世紀の中頃からぼつぼつ起ってきている新しい参加という意識がございます。民主主義のかかえる問題を解決しようというところで西ドイツにおいては共同決定方式等が現実のものとなっております。これは労使の参加理論でございますが、いづれも効率と公平、自由と平等との最も調和する道を

捜し出す考え方だと思えます。現在は参加主義理論というものが、産業民主主義の範疇で議論されているわけでございます。

今日、日本も経営参加ということが議論されておりますが、現実の姿はあまり前進しておりません。経営参加でもっとうまくいっている国はオーストリアでございますが、規模・社会風土等の違いから日本にこの例を適応させるわけにはまいりません。むしろ日本は集団倫理というものが発達しておりますので、企業別労働組合とか、終身雇用制という形で、既に経営参加が行なわれているという理論もあり、これを認めている外国人もかなりございます。以上がひとつの解決策として考えられる参加主義の見通しで、これはやはり日本人のみならず、世界の人も民主主義を存続させるための方向として十二分に、まともに取り組んで行かねばならない問題であると考えております。

己の欲望をいかにして統制していくかの問題になると考えております。

木内信胤氏

(世界経済調査会会長)

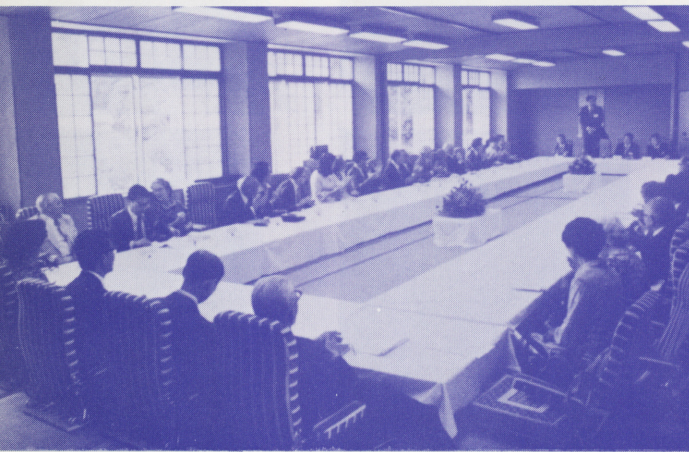
現在、世界不況をどうやって解決するかということについて日本へ注文がついております。アメリカは七パーセント、E Cは七・五パーセント、O E C Dは七・二パーセントの成長を日本に求めております。日本が注文どおりの成長をすれば、不況から脱出できるとの考えによるものと思われまます。しかし、この考えは倫理的でも、調和的でもございません。他の国に七パーセントの成長を迫ることは苦勞せずして、その思慮に浴そうとするものであります。倫理性にかなうとは、今まで以上に努力すること、更には、その結果として今まで以上に人がよくなることにあるわけです。

また、七パーセント成長ができるはずだ、いやできないとの議論は調和的とはいえません。社会の調和とは、譲り合い、察し

産業人会議より



開会のことばをのべる東芝・高瀬専務



箱根会場の討議風景



熱心にききいる婦人たち



芝翠荘の庭園での昼食会（箱根会場）

海外代表らと陽光のもとでの語らい





語る中山伊知郎氏（東京会場）



宮田義二氏



高瀬正二氏

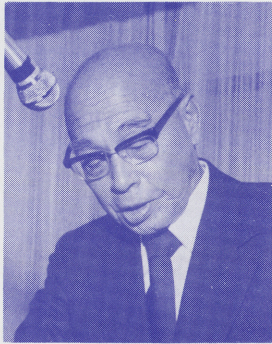


滝山 養氏



柳沢錬造氏

●について語る人びと



砂野 仁氏



尾関雅則氏



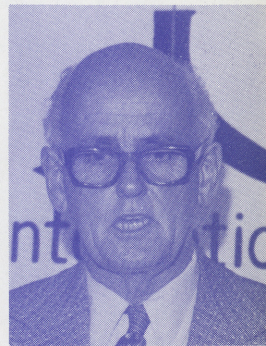
ディック・ラッフィン氏



河原亮三郎氏



河野一義氏



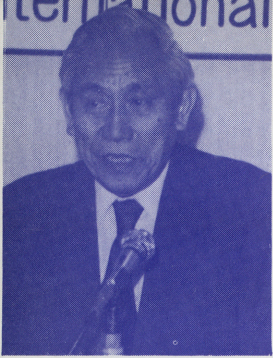
トム・ユーレン氏



佐藤 実氏



ジョン・ソーダランド氏



木内信胤氏



ダンカン・コーコラン氏



ボブ・ウエップ氏



ルーシー・コーケラン夫人



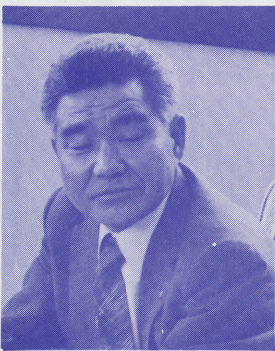
グラハム・ターナー氏



保坂玄造氏



ジーン・ターナー夫人



佐野嘉男氏



グレイム・コーディナー氏



語る中島正樹氏 (箱根会場)

新しい国際政治経済秩序



語るジャック・クレメンタイン氏 (箱根会場)



ソーダランド氏と語る東芝・河野、矢野、保坂氏ら



海外代表の発言をきく（手前から木内氏、中山氏、滝山氏）



懇親パーティでも話しがはずんだ（東京会場）



参加夫人たちは食事のサービングにも活躍した（箱根会場）

合いの中から生れるもので、理屈を言つて争つていては成り立ちえないものであります。

さて、そこで日本はどうするかという問題になります。「日本はこれまでの進路をかえます。」即ち、これまで物量の拡大がすべてだという考えを持っていましたが、この考えを捨てようと思ひます。どうかえるかと申しますと、「物はすべてほどほどに」と考えます。「過ぎたるは、なお及ばざるが如し。」という言葉葉を忘れないようにします。日本が、これまで物量の拡大に邁進してきたのは、国際的な自由競争には遠慮はいらないと考えていたわけでありますが、これからは相手の都合をも考えながら競争し、相手をつぶしてまで勝とうとはしない、いわば「ゲームとしての競争」を基礎に行動してゆくつもりだと申しあげてもよいでしょう。

河原 亮三郎氏

(東芝機械・相談役)

議会制民主主義は選挙というものを通らなければならず、選挙の投票者の大半は最近の若い人の票であります。ですから倫理性を軸にした物と心の調和をはかつていくというような事は、どうしても若い人の支持を得なければ、あるいは若い人がその方向に動いてくれなければならぬので、これはなかなか長丁場の仕事であります。

青年までの間に新しい調和の世界に骨を折ってもらえるようにならないことには本物にならないとつくづく感じているのであります。

ついでにわれわれMRAにおいても若い人の教育、行動といったことにまず挑戦していかないことには「百年河清を待つ」がごときで容易にいかないのではないかと感じている次第であります。本日のテーマは「一にかかつて教育に挑戦することである。」というのが私の結論です。

ジャック・クレメンタイン

(フランス・航空会社・部長)

第二次大戦の直後でしたが、

スイスのコーで私は世界というものに對して、まったく新しい概念を見い出しました。

私は軍におりましたので世界各国に軍人として参りました。ベトナム戦争の最中の二年間ベトナムにもおりましたし、その他フランスがアルジェリア戦争をおこしたときも五年程アルジェリアにおりました。またドイツとアルジェリアを除くアフリカの国々にもまいりました。

これらの国々でMRAの人物とを通じていろいろの現象を私自身が目撃してまいりましたが、それはいわゆる農民を中心とした共通の理念と同時に神に對する畏敬というものが中心であります。そういった二つのことが、人びとに調和をもたらしことができるのでして、それ以外では成し得ないということの色いろと証言者として、あるいは目撃者として感じてきたのであります。

ディック・ラフィン氏

(アメリカ・MRA財務理事)

箱根会議では、向う十年の問題を解決するためには、少なくとも二つのことが大切だということがあつたと思います。われ

われの頭脳より高い頭脳が必要だということが一つです。

そして心の声から生れるインスピレーション、または人との友情から生れるインスピレーション、あるいは一緒に世界に必要なことをやろうという気持ちから生れるインスピレーションが必要でです。アメリカの指導者にそれを持つて欲しいと思ひます。

それから第二点として、各国の輸出は何か新しい形のものが必要だということです。それは、ほんとうに生きる秘訣を学びとつた男女を輸出することが必要ではないかということです。

世界は、憎悪や貪欲や、人を分裂させるような問題に答えを与える人を、どんなに待ち望んでいることでしょうか。そして道に迷つた人びと、国々にがどんなに多いことでしょうか。

MRAの創設者ブックマン博士は、日本に對して非常に大きなビジョンを持っておられました。「日本はアジアの灯台になれる」と。道に迷つた人たちに道を照らすのは灯台ではないでしょうか。

こういつた目的に向つて努力をすれば、過去の過ちは逆に強

みになることができると思ひます。過ちが資産になり得るということでありまして、私がい

ことを言つても誰も感心しない、私が悪かつたことを認めますと、人が感心してくれるわけです。人においてそうであるならば国においてそうかも知れません。だからアメリカに関心が高いのでしょうか。

ボブ・ウエツプ氏

(アメリカ・インクアイラ紙 編集長)

ここ一年、日米の通商問題についてはいろいろの記事が書かれてまいりました。シンシナチ市というのは機械・工具の生産地として世界的な首都としての誇りを自他共に許していたわけですが、非常にアグレッシブな日本の皆さま方の競争に、まいったわけでは

消費者としての立場から申しますと、日本の電子機械にしてもその他のものにしてても感謝することが非常に多いわけでは

それは私どもの家庭においてただだけばどこをみても日本製のものばかりだということを

ご覧になれることができます。
私は数年前、MRAを通して
お目にかかった日本の友人のた
くさんのおかげで、政財界の人
たちの対日批判を受けても左右
されなかったということがいえ
ると思います。

私は、通常のアメリカ人たちが
聞き慣れたこととは違ったメ
ッセージを持つてくに帰りたい
と思います。そしていつの日
かアメリカの政財界の指導者た
ちが、アメリカの労働者に対し
て思いやっていると同じ気持ち
で、日本の労働者に対して思い
やってほしいと思います。

中山 伊知郎氏 (一ツ橋大・名誉教授)

戦後三十年間の世界経済の平
均成長率が、GNPにして約五
パーセントであります。最近の
数年間はオイルショックの結果、
非常にまずいことになっていま
すが、それでも五パーセントの
水準をかるうじて維持するよう
な状態になっております。

これは戦前の同じ三十年をみ
ますと、ご承知のように二パー
セントから三パーセント、つま
りちょうど戦後の半分しか成長

しておりません。この戦前の倍
の成長を可能ならしめたものは
何であつたか、私は二度の戦争
によってさんざん思い知らされ
た協力の大切さをとにかくそこ
で自分の身につけたことにある
と思います。

ところが不幸にして今日では
そのせつかくの協力が、世界的
にも国内的にもむしろ壊されつ
つあるとは言いませんが、非常
に乱れつつある。私どもの任務
は、この失われた精神的な地盤
を国際的にも国内的にもとり返
すことのほかにはないのである
いでしょかと思ひます。
そこで私は遠く今から三十年
近く前に、あのコーでのブツク
マンさんとの対話を思い出すの
であります。

砂野 仁氏 (川崎重工・相談役)

嘗て私は木内信胤先生にこう
申しあげたことがあります。「自
由圏のいいところを取り悪いと
ころを捨て、共産圏のいいとこ
ろを取り悪いところを捨てた新
しい経済、新しい政治の体制を
生み出すべき日がきているんで
はないか」と、しかしそういう

体制ができて、教育がもとで
すから、その教育が徹底しなけ
れば例えいいところを取つたみ
いいでも、それが調和しないわ
けです。

国民の基本的な教育、そうい
う新しい政治体制に対応する教
育が、基本的な解決しないと、
どんなものをつくってみてもう
まくいかない。

滝山 養氏 (国鉄・技師長)

高木総裁がこられまして、国
鉄の幹部が非常に無気力である
ということを指摘されておりま
す。これは国鉄の経営者が、国
会に、あるいは政府に、あるい
は時にはマスコミに非常に恐れ
を抱きまして、このほうに頭を
とられてしまっている。そのた
めに肝心の社会のためを考える
こととか、あるいは国民に対す
る思いやりが消えてしまってい
る。

そういう戦後の長い病根が非
常に根深いものであることを、
われわれは反省しなければなら
ないと思ひます。組合ばかりを
非難できない。われわれがまず
反省せざるを得ないのである

かと感じるわけでございます。

ジョン・ソーダーランド氏 (スエーデン・労組役員)

対決を処理する条件は私と私
のグループへの影響を顧みない
で、共に真実を探究する用意が
なければならぬ。徒党・派閥
の考え方を捨てなければならぬ
い。国とか社会の名を借りて自
分の欲と自分のグループの欲を
先行させるな。そして各人、各
グループも経済的な利害が違
うという事実を受けとめよう。

通常の人たちはなかなかこの
条件を与えて実行はしていませ
ん。違ったグループの人たちと
対話を求めたいと思うならば、
こういう条件を考えていかなけ
ればならないのです。対話に参
加したいと思う人は、自分に対
しても、また人に対しても正直
であることが前提になります。

それから自分の動機に対して
素直であり、正直な人は他人の
動機についてもわかるはずだ。
私の利己心、または私の属す
るグループの利己心が、対話の
道の大きな障害になって横たわ

るわけです。隣人を愛する力こ
そ対話を促進するいちばん大き
な動力となるのではないかと思
います。隣人を愛するためには
人種・階級・国境、そして世代
も超えて愛さなければならぬ。
それは大きな目標であります
が、この対話の道を追求すれば
必ず目標が達成できると思ひま
す。

トム・ユールン氏 (オーストラリア地所・副社長)

世界のいちばん大きな危機は
「石油危機」だということがよ
く言われています。しかし石油
危機よりも深刻な危機は精神的
の危機ではないか。そしていろ
いろな問題に対して答がないと
いう焦燥感、これがまた大きな
ことではないかと思ひます。

オーストラリアの首相の側近
で外交と防衛のアドバイザーで
あるアラン・グリフィス氏が昨
年、日本に参りましたが、現在
の世界的経済問題は一次産品の
基金をつくる努力をすることに
よって多少緩和できるのではな
いかというのが自分の所感だと
言っております。

最近訪日したフレイザー首相も、このことを福田首相にお話しするためにきたのだと思えますし、オーストラリアと日本との関係が新しい展開をなしまして、日本の友人を友人として激励してきたのだと思えます。

フレイザー首相のこの熱意とそれから先ほどお話しいただきました中山先生の熱意も持てる人たちが努力しない、そして持たざる人たちも無関心であるならば問題解決につながってゆかないことだろうと思えます。

宮田 義二氏 (鉄鋼労連・委員長)

新しい国の発展のために、社会資本にどれだけの金を費やしたほうがいいのかということでは意を要する必要があるだろう。その他、多くの経済運営や、国の進歩のために、国際的な経済の新たな秩序をつくるために、先進国がこぞって必要な富を出していく合意が必要ではないか。

その結果、労働組合の要求する賃金が低いような分配になっても、それがまんとするところから出発しないと、私は国際的な新しい経済の秩序は生まれな

いのではないかと思えます。

皆さんもご承知のように乏しさを憂うのではなくて等しからずを憂うところが案外、労働組合が反省しなければならぬ課題ではないかと自分自身が反省していることを訴えて私の所見に代えます。

グラハム・ターナー氏 (イギリス・評論家)

一九三〇年代の歴史を顧みますと「ファシズムに対してはそれはいけない。でもまあしかし」といったその結果が、ヒットラーの台頭ではなかったでしょう。この「いけない、けれども、まあしかし」という考え方は知的なせいではなくてあります。しかし、何千万人の人命が失われる危険を招くものです。

ですから、この人の掛け橋もいいことだけれども「イエス、でも」と私どもが言ったとしたらその結果はどうなりましょう。ですからこそ絶対的な道義標準というのが必要で。私と家内との掛け橋なくして、ほかの人たちの掛け橋がどうしてできましようか。自分の出世だけを求めていて、人の掛け橋ができるで

しょうか。私は人の掛け橋をつくる助けをしたいと思えます。

たまたま、日本と英国は島国であります。その島国の国民が、世界の橋をかけるお役にたとうではありませんか。

日本は素晴らしい国だと思えます。そして日本の国民を好きになるのはちつとも難しいことだと思いません。非常に卒直で、素直な国民だと思えます。英国人に対してはそのような評論はなかなかしにくいものだと思います。

英国人から日本人を見る場合に、私は「日本人はすばらしい、けれども、まあ……」とは申しません。「すばらしい」というところで終止符を打ちたいと思えます。

河野 一義氏 (東芝労組・副執行委員長)

東芝労組の賃金交渉の集約投票率は九〇・三二パーセントという高い率で組合員の賛成を得ております。このことを考えてみますと、現在のような国が大きな曲り角にたっている時に、労働組合だけが高度成長や好況の時と同じように、不況の嵐の中から逃避していることは許されないのではないか、あるいは

それを追求することは労組のエゴではないかということに組合員がそれなりに理解してくれた結果だと考えているわけです。

これは私が昨年のコーで体験した自らの良心に恥じない精神をもち、自らの心に問うて投票してくれたものと確信しております。このような難しい時代には労使が一体となって何が正しいかを追求しなければならぬのではないかと、そして実行しなければならぬのではないかと、いうことをさらに強く感じているわけです。

柳 沢 錬造氏 (参議院議員)

今回のテーマの中にある「倫理性」ということばに正直なところ私はなじまなかったのです。家に帰って辞典をひきましたら「倫理とは人間として踏み行なうべき道」と書いてありました。人間として生きていくために踏んでいかなくてはならない、あたりまえの道という。私はこの言葉になじまなくなってしまうところに、今日の時代の、今日の社会の混乱の大きな要因があると思えるわけです。

MRAの四つの道義標準を、そして今回のテーマである倫理観、それを柱にして、基盤にして、その共通の基盤の上でお互いに話し合いをしていくときに、いろいろと分裂している国内の問題も、そして今日の世界大の国際的問題についても解答がみいだせるのではないかと思えます。

毎日、静かな時間をもって、自分は問題をおこす側に立っているのか、問題に答を与える側に立っているのかということに毎日、見詰めていくべきだと思います。

解答を与えていく側にたつていくこと、それが今日、ここに集まった私たちの課題であり、使命であると思えます。

そのために私たちは、これから毎日、静かな時間を持ち、良心の声を聞き、神の声を聞き、それに従っていくとき、その先に、新しい日本と新しい世界が展望されてくるのです。



MRA世界大会状景 (1977年マウンテンハウス)



ケーキ作りを手伝う子供たち (マウンテンハウス)

1978年度

MRA世界大会への招待

■会期・一九七八年七月八日～九月四日

■会場・スイス・コー・マウンテンハウス

■テーマ・生活に生かされたデモクラシーを求めて

生活に生かされたデモクラシーを求める人びとの声
が世界中で、東から西からそして南からも北からもま
き起りつつあります。

デモクラシーは単に投票箱の中味に頼るべきでなく、
日常生活での人間関係を結ぶ道義性に求められている
のです。

スキヤンダルの発生は公人に対する信頼を減少して
います。

指導者の汚職は当りまえのようになっていきます。一
般の人びとは責任をすべて他に転嫁したり、組織の故
にしています。

制度を変えるだけではデモクラシーを救うことはで
きません。

個人の良心が死滅するとき、国の道義的権威もまた

死滅します。権力をもってこれに代えようとしても成
功はしません。

「誰にしろ、どこにしろ精神的、道義的な再武装を
必要としている」とフランク・ブックマンは四十年前
に言っています。

神の計画に基いた世界秩序を建設すること、これこ
そすべての人がなしうる仕事であり、生き甲斐でもあ
ります。

コー(大会会場)そこは毎年多くの人びと——食し
い国からも富んだ国からも、大きな組織を代表する人
も、次代を荷負う若者たちも、みなが集って現在の難
局を切り開く必要な人間革命の進展を評価し、さらに
個々人として自らの生活を通してその革命をどう推進
できるかを語り合う場であります。

一八七八年
(百年前)

フランク・ブックマン ペンシルヴァニアに生れる。先祖は信仰に根ざした社会を建設する自
由を求めてヨーロッパから移住した。

一九三八年
(四十年前)

軍拡競争の修羅場であったヨーロッパで「道義的、精神的再武装」運動を展開する。目前の戦
争を超えた次元で、ブックマンは世界的規模での社会の大変革は良心の新しい目覚めによつて
のみ可能であることを察知した。

一九七八年
(現在)

ブックマン没して十七年、政治家も、知識人も、国際問題専門家も、若い活動家も、普通一般
人が心の奥底で感じはじめているのと同じ結論に到達している。新しい型の社会は個々人の人
間性の変革によつて初めて可能である。